

MACROCOSM



CONTENTS

- 2 日本・ASEANユースリーダーズサミット
- 4 第18回青少年国際交流全国フォーラム
日本青年国際交流機構第27回全国大会(和歌山大会)
- 10 SWYAA国際大会(メキシコ)
- 12 IYEO東日本大震災復興支援
- 14 青年社会活動コアリーダー育成プログラム プレ10周年

マクロコズム

日本・ASEAN ユースリーダーズサミット

平成23年10月29日(土)～11月1日(火)、「東南アジア青年の船」事業の国内プログラムの一環で、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターにて、「日本・ASEANユースリーダーズサミット」が開催されました。日本と東南アジア諸国連合(ASEAN)各国及びASEAN各国相互の連携を強化するために、より多くの青年が日本とASEAN各国を結ぶネットワークに参加することを目的として、駐日ASEAN各国大使館及び日本アセアンセンターと連携して行われる、ディスカッション及び文化交流を中心とした合宿型プログラムです。日本で公募されたローカル・ユース106名、「東南アジア青年の船」事業の参加者328名及び実行委員や運営関係者約65名が参加しました。



参加青年と懇談される秋篠宮妃殿下

日程

日付	活動内容
10月29日(土)	ローカル・ユース事前研修 オリエンテーション、ディスカッション講座、パフォーマンス準備
10月30日(日)	ローカル・ユース事前研修 ディスカッション活動 「東南アジア青年の船」事業参加青年入所 全体オリエンテーション、ディスカッション・グループ活動
10月31日(月)	「日本・ASEAN文化交流プログラム」準備 「日本・ASEANユースリーダーズサミット」開会式 「日本・ASEAN文化交流プログラム」 各国紹介パフォーマンス、各国紹介ブース展示 交流のタベ
11月1日(火)	基調講演 テーマ: Living Together 講演者: 池上清子氏(日本大学大学院教授、前国連人口基金東京事務所長、第1回「東南アジア青年の船」事業既参加青年) ディスカッション・グループ活動、サマリープレゼンテーション ローカル・ユース修了式、歓送会

【開会式】

秋篠宮妃殿下、駐日ASEAN各国大使並びに関係者が出席し、中塚一宏内閣府副大臣及び駐日ASEAN各国大使を代表してカンボジア王国ハオ・モニラット特命全権大使からあいさつがありました。また、参加青年を代表し、ミャンマーのユース・リーダーのモー・タウさんがあいさつしました。

【日本・ASEAN文化交流プログラム】

“Explore Asia! -Feel our passion-” をテーマに、第1部では、各国3分間のパフォーマンスと、11か国の参加青年とローカル・ユースによる合同パフォーマンスが行われました。第2部は、国ごとのブース展示があり、各国の事情について理解を深める良い機会となりました。また、Piece of Peace(ピースオブピース)というASEAN10か国と日本のあいさつ、基本情報、トリビア等が掲載された冊子が配布され、来場者と参加青年が交流を深めるきっかけとなりました。開会式及び「日本・ASEAN文化交流プログラム」には、来賓、関係者、一般の方々を含め約200名が参加しました。



日本・ASEAN文化交流プログラムのフィリピン参加青年によるパフォーマンス

【ディスカッション・グループ活動】

「青年の社会参加—青年の力を今こそ社会へ!」というテーマのもと、八つのグループに分かれて実施されました。各国の青年による率直な意見交換を通じて、社会に貢献する活動をつくりあげるうえで、自分の力をどのように発揮できるかについて議論しました。また、最終日には、話し合いの成果をグループ毎に発表しました。



展示でカンボジアの伝統楽器の演奏の仕方を教わるローカル・ユース



ディスカッションにて、自分たち青年がどのように社会に貢献できるか話し合う

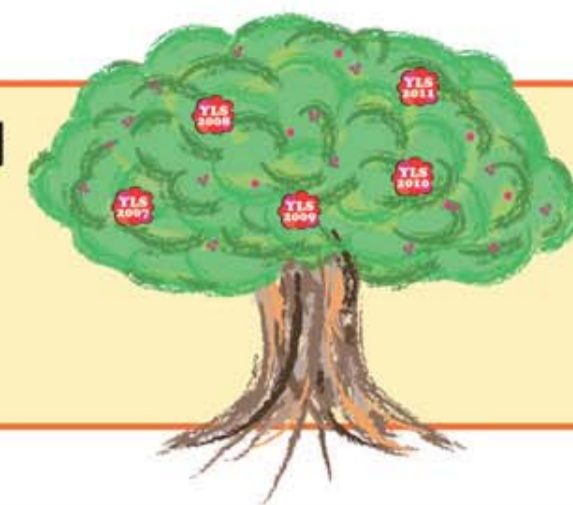


話し合った内容を参加者全員の前で発表する

Q

日本・ASEANユースリーダーズサミット(YLS)に参加したローカル・ユースへの質問

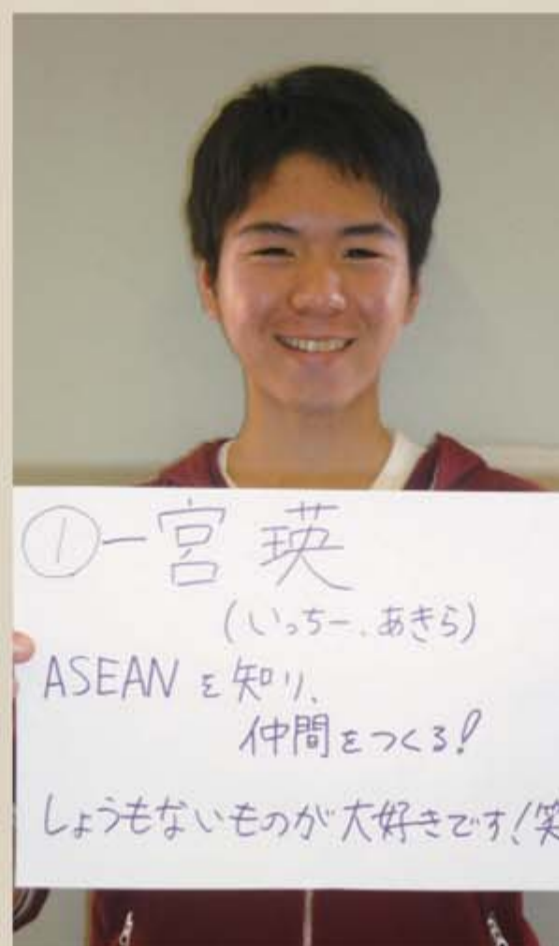
- ① 4日間でどんなことを得ましたか？
- ② 4日間、自分の抱負にどう取り組み、何を達成しましたか？
- ③ 今回の経験をいかし、今後どうしていきたいですか？



榎本 高嶺

- ② 多くの人に出会い、思いを分かち合いました。共に笑い、生きる仲間を日本各地、ASEAN各国に得ました。
- ③ 自分の目で見ること、心で感じることを大切にしたいです。とびきりの笑顔やつないだ手の温かさ、明るくパワフルな歌や踊り、「今」を共有した時間。一つ一つを大切に周りの人に伝えていきたいです。

⑧ 榎本 高嶺
(たかね)
たくさんの人に出会う♡
笑顔♡おしゃべり好き♡



一宮 瑛

- ① YLSに参加して、思い立ってから行動するまでの敷居が低くなりました。今までは考えすぎて腰が重かったのですが、その時の興味や好奇心を大切に、まずは動いてみる姿勢を得ることができました。
- ② 見知った人の輪を大切にしつつも、そこに安住せず、特に、食事の際は話したことのないPY(参加青年)の集まりに飛び込むようにしました。幅広く多くの人と話せましたし、こちら次第で温かく迎え入れてもらえることを知りました。
- ③ YLSの経験をいかし、どんな異文化の人にも対等に受け入れて「国際交流」から「人間交流」に持ち込める技量を手に入れたいです。

① 一宮 瑛
(いちみ-あきら)
ASEANを知り、
仲間をつくらせ!
しょうもないものが大好きです!笑



木村 徹郎

- ① 自分の住んでいる世界は小さく、まだ知らない世界がたくさんあることを痛感しました。
- ② 多くの人と交流し、学ぼうと思っていました。自分はまだやれるという気持ちになりました。
- ③ 今後もグローバルに多くの人と交流し、自分を高めてくれる人と関係を築いていきます。そして、自分の経験を伝えて生徒の成長を助けられる先生になります。

④ 木村 徹郎
(キム)
楽しむ!!
楽しいこと大好き!



高橋 由貴子

- ① 日本にはない東南アジア各国の魅力、“youth”の力が持つ大きな可能性、様々なバックグラウンドを持つ多くの大切な友人
- ② 昨年3月11日、私の生まれ育った東北地方で発生した東日本大震災。私の抱負はそのような震災時に“youth”として今後何が出来るか、どのような状況であったかを伝えることでした。昨年はタイで洪水があったこともあり、グループ・ディスカッションの中で災害時の“youth”としての役割を話し合いました。震災で感じたことをASEAN各国の人に伝え、議論したことは一生忘れられない時間となりました。
- ③ 大好きな地元のために、“youth”として貢献し続けること、多くの交流事業に参加し、多くの人や考えと出会い、自分の創造力を更に磨いていきたいです。今回出会ったすてきな友人との交流を続けていきたいです。

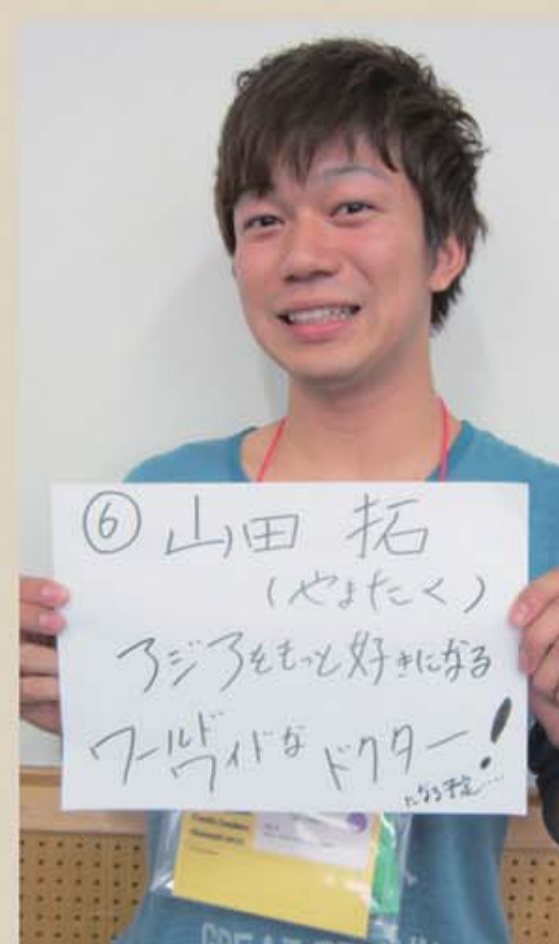
⑤ 高橋 由貴子(ゆこ)
たくさん学ぶ!話す!!
素晴らしい4日間です!!
東北代表として頑張ります!!



高梨 亜美

- ① 国際人権の保護を人生のキャリアの最終目標としていた私は、言葉では伝えきれない程の希望を与えてもらいました。どんなに真剣に世界平和や人権保護を語り、目標としても、否定する人が必ずいて、心が折れそうになることがあります。しかし、このYLSを通して「世界平和は夢じゃない」「国境を越えて解り合うってこういうことなんだ」「一つになるってこういうことなんだ」と肌で感じました。この感動を人に伝えていける人間になりたいと思いましたし、将来へのモチベーションが上がりました!このような経験は普段できないので、この機会を与えて下さった皆様に感謝しています。

⑥ 高梨 亜美
(Ami)
今のアジアを見つめる・知る
Feel free to talk to me ♡♡!!



山田 拓

- ③ 今回の経験を踏まえ、新たな人との連携や、社会、世界に向けた活動を計画・実践したいです。将来は医療分野での活動を予定しているので、患者さんとの関係やチーム医療の現場など、様々な方と連携する場でのコミュニケーション能力としていかしていきたいと思います。世界規模での医療活動、あるいは日本を世界から見る包括的な視点を持った医療活動に興味があり、今回得た異文化への理解、諸外国青年との友情や交流の経験をいかして自分を世界に発信できるような活動・プログラムを実践したいです。

⑥ 山田 拓
(やまたく)
3ジジももっと好きになる
7-11が大好き!

青少年国際交流事業事後活動推進大会 日本青年国際交流機構第27回全国大会 第18回青少年国際交流全国フォーラム 和歌山大会

平成23年11月26日(土)～27日(日)、和歌山県和歌山市にて、第18回青少年国際交流全国フォーラム、日本青年国際交流機構(IYEO)第27回全国大会を実施しました。大会テーマは、「つなぐ、育む、輝く命。～紀の国から宙へ～」とし、基調講演や分科会を通じて、人と人をつなぎ、参加者の豊かな国際的経験や多様な視点が新たな価値を生み、その成果が大きく広がることを目指して企画されました。基調講演者の荒川氏は、学生の時に自分を変えたい一心で始めたゴミ拾い活動を様々な協力を得ながら、世界的に広めた人です。26歳にしてNPOを立ち上げ、自らの体験をもとにした青少年を対象とした講演活動を継続して数多く実施しています。

大会日程

第1日目・11月26日(土)	
12:30	受付
13:30	開会式
14:00～15:15	基調講演 荒川祐二氏(NPO法人世界護美推進連盟理事長)
15:30～17:30	分科会
19:00	懇談会
第2日目・11月27日(日)	
9:00	表彰式
9:30	東日本大震災及び台風12号による災害復興支援活動報告
11:00～11:15	閉会式



開会式であいさつする(財)青少年国際交流推進センター
上村知昭理事長



■基調講演 「半ケツとゴミ拾い ～たった一人から全世界10万人へ～」

講演者：荒川祐二氏

平成23年11月26日(土)

和歌山マリーナシティロイヤルパインズホテル

緊張しています…
荒川祐二と申します。
よろしくお願ひしま
す。これから一時間、
お話をさせていただきます
ますが、僕は、皆
様のよう^{そら}に人生経験
が豊富ではありません
し、「こうしたら幸

せになれるよ」と伝えられる人間でもありません。僕は、自分のことが大嫌いで、自分なんか死んだ方がましだと思いながら大学生活を送っているような人間でした。そんな自分が嫌で、2006年11月、自分を変えたいという一心で、新宿駅東口でゴミ拾いを始めてみました。

ゴミ拾いを始めた理由

この活動を始めた理由は、最近の若い人に多いんですが、夢も自信もなく、自分のことが大嫌い。でも、とりあえず、ご飯も食べられるし、特に不自由もしていないから、今のままでもいいかと思ひながらも、心の奥底ではこのままではダメだ、変わらなくては…とずっと思っていたからです。僕には一つ年上の兄がいるのですが、大学3年生20歳の秋に、こう言われたんです。「お前、『変わりたい』って口ばかりじゃないか。本当に変わりたいかと思ったら、何でもいいから実際に行動しろ！」これまで、誰からも本気で注意されたことがありませんでしたが、この時は、兄から胸ぐらをつかまれるくらいの勢いで怒られました。これは僕の心にガンと響き、「何でもいいから実際に行動しろ！」という言葉が何度も頭の中で回りました。

僕は、「じゃあ、毎朝6時から新宿駅でゴミ拾いする！」と言いました。当時の僕は、実は何もできることがなかったからです。これまで何も努力してこなかった人間が20歳になって、突然、「がんばります！」と宣言したって、今さら、何もがんばれないんです。自分には何ができるんだ？と考えた時、「ゴミ拾いだったら、できるかもしれない」と思ったのです。汚いという強烈な印象があったので、新宿駅でゴミ拾いをしようと決めました。

この僕の決意を聞いて、兄がこう言いました。「お前、今、ものすごくいいことを言っているけど、絶対無理だ！お前、もう変わった気になってないか？人間というのは、『変わりたい、これからやります』と言うだけで、気持ちが高ぶって、すっかり変わった気になってしまう。変わった気になっているから、何も行動しないまま一週間、10日と時間がたって、結局は変わらない自分に気づく。だから、今のお前は、まだ変わっていない荒川祐二だぞ。お前が本当に変わる時というのは、実際に朝6時に新宿駅に行って、ゴミ拾いをして、それを継続できた時だ。どれだけ短くてもいいから、期間を決めて、その間だけは絶対にやり遂げる」いいこと言うな、この男は、と思ひ、「分かった。1か月だけは続けます」と宣言したところから、僕の挑戦が始まったのです。社会を変えようとかそんな壮大な気分ではありませんでした。自分にできることがゴミ拾いしかなかったので、自分を変えたい一心で、2006年11月8日に、僕の挑戦が始まりました。

ゴミ以下の扱いを受ける

朝6時、階段を上って目の前に広がったのは、ゴミ捨て場並みにゴミが落ちていた光景でした。ここまで汚いとは思っていませんでしたが、ゴミ拾いに来たのですから、ゴミが落ちていたのは当然です。一



番驚いたのは、朝の6時の新宿駅東口にいたのは、ホスト、ホームレス、ヤクザ、酔っ払いだったことです。一瞬、ひるんだのですが、僕はこれから、街をきれいにする良い活動をするのだから、嫌がらせなんかされるはずがないと思いながら、ゴミを拾い始めました。すると、ヤクザが寄ってきて、僕をにらみつけ、僕の目の前でタバコをポーンって捨てたんです。僕がゴミを拾っているのを見ていたのにですよ。初日のゴミ拾いは、2時間かけても半分も終わりませんでした。

次の日、昨日、あれだけ掃除したから、今日はきっときれいだろうと思って行ったら、もうゴミが散乱していました。僕は知らなかったのですが、ヤクザさんには縄張りがあって、どんなに良いことであっても自分の縄張りで勝手なことをされるのが気に食わなかったようです。だから、あいつをとっとと追い出せということで、嫌がらせがエスカレートしていきました。2日目、持参したホウキをへし折られました。3日目、ヤクザさんから「おい、偽善者！」とののしられました。4日目、また、ヤクザさんから「おい！」って声をかけられ、怖いから、無視、無視、と見ないようにしていたら、「無視するな！」と怒鳴られて、後ろから殴られました。5日目、ゴミを拾っていたら遠くからピンを投げつけられました。僕には当たらなかったんですけど、近くの壁に当たって割れていました。つばをはきかけられたこともありました。1週間目には、頭からオレンジジュースをかけられました。一番すごかったのは10日目。いつも通りゴミを拾っていたら、バサッという音がして、何かが当たったんです。なんと、カラスの死体なんです。わざわざカラスの死体を持ってきて、僕に投げつけるって、すごいですよ。

つらくてもやめられなかった

皆さん、想像してみてくださいよ。何とかがんばろうとゴミ拾いを始めたら、こんな扱いを受けるんですよ。つらくて、悔しくて、何度もやめようと思ったんですけど、やめられませんでした。それは、1か月は続けるという約束を兄としていたからなんです。しかも、兄に、「もし、お前が1か月続けられなかったら、これからはお前のごことを一生『負け犬』と呼ぶからな」と言われていたんです。

ちょうど2週間たったある日、いつも通りゴミを拾っていたら、ぜんぜん嫌がらせをされませんでした。今日はハッピーだなと思っていたら、なぜか人が全然いないんです。おかしいなあと周りを見ると、向こうに150人くらいの人ばかりができていました。見に行ったら、ケンカしているんです。ケンカなんてしょっちゅうあるんですよ。ホスト同士で肩がぶつかったとか、くだらない理由でケンカしているんです。でも、これは、とんでもないケンカだったんです。ケンカしていたのが、プロレスラーとサラリーマンだったんです。そんなでっかいヤツが暴れているから、誰も止められないんです。まずいよ、誰か止

めてよ、と思っていると、誰かが僕の方を向いて、「お前さ、ボランティアしているんじゃないのか。これもボランティアだから、お前、止めに行けよ」と言うんです。こんなのボランティアじゃない、行ったら、絶対にケガをする、行くもんかと思っているのに、みんなが、「お前が行け」という顔をしているんですよ。絶対に行かない！と思って、パッと横を向いたら、視線の先にホームレスのおじさんが寝ているのが見えました。こんな状況でよく寝られるなあと思ったんですが、そのおじさんが着ていたTシャツに書いてあるメッセージが目に入りました。「逃げちゃダメだ」と書いてあるんです！もう、分かった、僕が行けばいいんでしょう、と思って、止めに入ったら、案

の定、僕はあっさり投げられて、きれいな空が見えた〜と思った瞬間、ドーンと落下して、気を失ったんです。意識が遠のいていく中で、僕は素直に思いました。「もうこんなことやめよう」って。幸いにも大ケガをすることなく、家に帰ることができたのですが、帰り道では涙が止まりませんでした。

結局、変わることはできないのか

涙の原因は、僕は一生変わることができないのかという思いでした。どれほど本気になっても、一生かかっても僕は変わることができないのか、と涙が止まりませんでした。ゴミ拾いなんかで人生が変わるわけがないから、もうやめようと思いました。それで、目覚まし時計をいつもなら5時にセットするのを8時にセットして、電気を消して寝ようと思いました。

でも、電気を消したとたんに、僕の中のもう一人の自分が出てきて、「お前、それで本当にいいのか」と言うのです。「お前、ここまで本気ががんばったじゃないか、毎朝6時からのゴミ拾いを2週間続けたんだぞ。あと半分じゃないのか。ここまでやって、あきらめるのか。もし、ここであきらめたら、お前は『やっぱり、できませんでした』と言うだろう。でも、それは『できなかった』とは違う。『やらなかった』だけだ。やるか、やらないかだけの話だろう。やっぱり、お前は一生変わらない。それでいいのか！」よくないのですが、ゴミ拾いで人生が変わるわけはないし、明日でゴミ拾いを終わりにすることにしました。

手伝ってくれる人が現れた！

次の日、「お前、また来たのか、懲りないな〜」とか「パーカ」とか言われました。1時間ゴミを拾って、よくがんばったなあと久しぶりに周りを見渡したのです。それまで周りを見る余裕もなかったんです。すると、ある光景が目に入りました。今日で最後にしようとしていたまさにその時に、なんとホームレスのおじさんがホウキとちりとりを持って、足を引きずりながら掃除しているのに気づきました。

その人は石浜さんという人で、僕がゴミを拾っていても、いつもポケーっと座っているだけでしたから、なぜ、その日に限って手伝ってくれるのか、僕には分かりませんでした。でも、この様子を見て、今日で最後にしようと思っていたのに、もしかしたら、明日もがんばれるかもしれないという気持ちになったんです。次の日の6時、目に入ってきた光景は、



「半ケツとゴミ拾い」 荒川祐二著 地湧社 ¥1,400



なんと昨日と同じでした。僕は、石浜さんに「ありがとうございます」と言って、ゴミ拾いをし、その次の日も、またその次の日も同じことが続きました。石浜さんは、毎朝僕と一緒にゴミを拾ってくれるようになり、僕も、また石浜さんがいてくれるかなと思って新宿駅に向かうようになりました。あの日、石浜さんに出会っていませんでした。僕は今日、

ここに立っていませんでした。あの人は僕にあきらめさせないために現れてくれた神様だと思っています。

気づけば3週間がたっていました。ある日、石浜さんが僕のところに来て、「なんか、変なおじさんがいるんです」と言うので、指差した方向を見ると、でっかいゴミ袋とほうきを持って、ぼろぼろの服を着たおじさんが座っていました。「すみません、手伝ってくれたんですか?」と聞いてみたら、市倉さんという方で、これから掃除を手伝ってくれるということでした。僕の当初の目標は、女の子に囲まれて掃除するはずだったのですが、なぜか、60代のおじさんに囲まれた掃除に変わっていました。それでも、僕はとてもうれしく、次の日も次の日も足は自然と新宿に向かっていました。

1か月の目標を達成した!

気が付くと、目標の1か月に達成できていました。でも、目標を達成したから、もうやめよう、という気持ちではありませんでした。石浜さんと市倉さんを残して「僕は目標を達成したので、もうやめます。お疲れ様でした」とは言えなかったです。

それに、1か月が過ぎると、小さな変化が起きてきました。ある日、いつも僕の目の前でゴミを捨てていたホストのお兄さんがやって来て、「兄ちゃん、ごめん」と言ったのです。「俺、兄ちゃんを初めて見たとき、こいつは何かいいことをして、テレビなんかに出て、有名になってちやほやされようという偽善者だと思ったから、無性に腹が立った。だから、やめさせてやろうと思って、目の前でゴミを捨てたりしたけど、実は、1か月、ずっと兄ちゃんのことを見ていた。兄ちゃん、本気でやっているな。俺は、ゴミ拾いは正直言って恥ずかしくてできないけど、兄ちゃんの姿を見ていたら、ポイ捨てはできないと思ったから、やめる。これまでごめん」と言ってくれたのです。

また、目の前でゴミを捨てたり、顔につばを吐きかけたり、カラスを投げつけたりしたあの悪魔のようなヤクザのおじさんが、またやって来て「おい!」って言うのです。また何かされるのかと思ってビクビクしていたら、ずっと何かを差し出すんです。それは、温かい缶コーヒーでした。3日前まで、僕に嫌がらせをしていた人が、缶コーヒーをくれたのです。僕は、「あ、あの、ありがとうございます」と言って、コーヒーを開けて飲んだのですが、その間、おじさんは僕の方をにらみつけたまま動かないのです。ようやく、おじさんが身動きをして振り返り際に、「お前、これからはがんばれよ」と言ったのです。カッコいい! このおじさん! と思いました。

ある時は、通勤時のサラリーマンが、「いつもありがとう。ご苦労様」と声をかけてくれたり、お婆さんが毎朝、差し入れを買ってきてくれたりするようになりました。こんな変化がどんどん起きるようになりました。

僕にとってはとてもすごいことですが、他の人から見たら、取るに足りないことかもしれません。僕の目の前でゴミを捨てていた人がゴミを持って来てくれるようになったこととか、たった120円の缶コー

ヒーをもらったこととか。僕は今まで、何万円も何十万円もするような時計や服を買ってもらっても、「ありがとうございます」と言ったこともありませんでした。学費を払ってもらっても、仕送りしてもらっても、当たり前だと思っていました。でも、顔につばを吐きかけられたり、偽善者と言われたり、そういう経験をしたからこそ、たった120円の缶コーヒーに対しても、心から感謝の気持ちをこめて「ありがとうございます」と言えるようになったのだと思います。目の前でゴミを捨てていた人が僕にゴミを持ってきてくれるというたったそれだけの変化に、「ありがとうございます」と言って、喜びを感じる自分に少しずつ変わっていったのです。

新聞に掲載される

11月からゴミ拾いを始めたので、2か月経つと年末になりました。ゴミ拾いが楽しくなってきた僕でしたが、年末年始くらいは休んで、大阪に帰省してもいいだろうと思いました。それで、「12月28日を最後にして、29日から1月3日は休みます。僕は大阪に帰ってゴミ拾いに来ないから、石浜さんと市倉さんもゆっくり休んでくださいね。分かりましたか?」と言いました。石浜さんは、「分かりました!」市倉さんは「…」という感じでしたので、本当に分かっているのかなあと思ったのですが、僕は大阪に帰りました。

大阪に帰ったら、10時に起きて、漫画読んでゲームして昼寝して、あー最高! 幸せ! と思っていました。お母さんのおいしいご飯を食べていると、夜の8時半頃、僕の携帯電話が鳴ったのです。大学の友人からメールが来ました。「新聞見たよ!」「新聞?」「祐二くんのこと、けっこう大きく新聞に載っていたよ!」「??」なんと、朝日新聞の社会面に「新宿東口20歳の清掃」というタイトルで大きな記事が載っていたのです。そういえば、「何しているのですか、一人でやっているのですか、いつからやっているのですか」など、根掘り葉掘り訊いてくる人がいたことを思い出しました。「僕は荒川祐二といいます。上智大学に通っています。自分を変えたいという思いでやっています」と丁寧に全部答えたことも思い出しました。

どうやら、あの人らしい。「掃除をする荒川祐二さん。東京JR新宿駅東口広場で」と記事にあります。僕が驚愕したのは「世界を変えたい!」と書いてあったことです。僕はそんなこと言っていない!! 自分を変えたいとは言ったけど…そして、「目に見えて感じる変化を力に、荒川さんは明日からも毎朝掃除をしたいと思っている」と続いています。「背中に下げているのは『一緒に掃除してくれる人募集』という手書きのダンボール。どうやら荒川さんは仲間を募集しているらしい。できれば行ってあげてほしい」という内容まで書かれています。これ、ちょっと…とっていると、後ろからのぞき見をしていた兄がこう言い出しました。「お前、今から東京に帰ったほうがいいんじゃない?」



仲間が増える

明日もゆっくりして、漫画でも読んで、幸せな時間を過ごそうと思っていた僕は、その夜、最終の新幹線で東京に戻りました。家に着いたのが夜中で、2時間だけ寝て、朝5時に起きて新宿駅に行きました。なんでこんなことしているんだ…と思いながら、階段をトボトボ上がって行くと、最初に目に入ったのは、なんと、石浜さんと市倉さんがゴミを拾ってくれている光景でした。年末年始は休みにしようと言ったの

に、掃除をしてきていたんです。さらに、「さっき、新聞を見たんですけど」という中学生、高校生、大学生の3人が手伝いに来てくれました。仲間で2人から5人に増えたのです！

年が明けて、奇跡が始まりました。僕の活動が新聞に掲載された半月後に、NHKでも放映されたのですが、「新聞見ました」「映像を見ました」という若者が現れるようになりました。ゴミ拾いを始めて三か月後の2月10日には、仲間が50人も集まったのです。いつも通りに石浜さんと市倉さんが来てくれて、ああ、いつもありがとう、と思っていたら、どんどん仲間が増えてきて、「北海道から来ました」「沖縄から来ました」「大阪から来ました」「ロシアから来ました」…なんと50人！「僕も何かしたかったけれど、何をすればいいかわからなかったんです。その時に荒川さんの記事見て、これだったら僕にもできるかなって思って来ました」と言ってくれました。

これを見た周りの人たちは、「あいつは最初、一人だったのに、どうしてこんなことになっているのか」と言い出し、協力的になってきました。僕より先にホストの人たちが来て、掃除をしてくれました。あのヤクザのおじさんは、絶対に手伝ったりはしないのですが、酔っ払いがタバコを捨てていると、「お前、ここ捨てるんじゃないぞ！」と注意していました。捨てる人が減って、拾う人が増えたので、ゴミが減っていき、掃除をする箇所も1か所から5か所に増えました。僕は新宿駅に行くのが楽しみになり、目覚ましをかけなくても、5時に目が覚め、6時に新宿駅に行くと、何十人もの仲間が待っていてくれるようになりました。

5月3日(ゴミの日)に444人が集まる

掃除を始めて半年後の5月3日。5と3でゴミの日ということで、全国で一斉にゴミ拾いをしようというイベントを開催しました。なんと、その日、新宿駅では、100人以上、全国で444人集まったんです。

その夜、僕が一人でボーっとしていると、久しぶりにもう一人の自分が問いかけてきたんです。「お前、よくがんばったな。つらかったな。でも、あきらめなかったよな。それでどうだった？仲間が増えたよな。一人、二人、そして、50人。今日は444人！すごいことができた。お前、自分のことが好きになったか？」その時、初めて自分のことが好きになった僕がそこにいました。初めて自分に自信を持つことができました。自分のことが大嫌いで、できることといえばゴミ拾いしかなかった僕が。ゴミ拾いをやってみたら、最初はゴミ以下の扱いをされ、惨めな自分だった僕が……。

兄との約束に支えられ、石浜さんに支えられ、なんとかあきらめずに今日まで続けることができました。何も特別なことはしていません。自分にできることをやっただけです。ゴミ拾いの活動は、2008年5月3日には全国50か所以上で約1500人、2009年5月3日には、世界26か国で1万5千534人に、そして昨年2010年5月3日には、世界30か国以上で10万3036人と広がっていきました。今年の5月3日には、環境省のお墨つきまでいただいて、今では国民運動となりました。僕自身は大学を卒業して、飲食店を3店舗経営し、スタッフ約50人と毎日一緒に仕事をしています。また、作家の仕事や、こういう形で皆

さんにお話をし、ゴミ拾いも継続しています。

2006年の11月8日、あの時一步を踏み出して本当によかったと思っています。あの一步を踏み出さなければ、今日、僕はここに立っていませんでした。本当にあきらめなくてよかった。あきらめていたら、今の自分はなかったのです。今では、大好きな自分と大好きな仕事と大好きな人生があります。

自分にできることをする

中学校や高校で講演会をすると、「荒川さん、すごいですよね」「特別ですよ」と言われることがよくあります。今の荒川祐二だけを見たら、特別な人間だと思うかもしれません。でも、今までの話を聞いてもらったら、ちっともかっこ良くないですよ。自分を変えたくて始めたことをなんとかあきらめずに続けていたら、道が開けていったというだけのことなのです。だから、分かってほしいのはいっただけです。人生を変えるのに特別なことは何もいらぬということ。今、自分に何ができるかを考え、できることを今、この瞬間から始め、あきらめずに一つ一つ行っていけば、必ず理想の未来が待っているということです。

縦のつながりと横のつながり

大会のテーマである「つなぐ、育む、輝く命。～紀の国から宙へ～」について、少しお話しします。社会を変えたい、日本を変えたい、と皆さんは考えていると思います。僕は、縦のつながりと横のつながりが必要だと思っています。縦のつながりとは、みなさんご自身と、ご両親、ご先祖、IYEOの先輩方とのつながりです。先輩が作ってきた道を今の自分自身ももっともっと発展させていこうということです。自分の人生だから、好きにすればいいという刹那的な人生は寂しいと思うんです。今までに誰かが作ってくれた道だから、自分たちでより良い未来にしていこうという縦のつながりを自分たち一人一人が意識して、先輩を越えていこうという思いを持つことが大切です。

もう一つは横のつながりです。例えば、素晴らしい人が現れて、たった一日で社会を変えてくれたとします。でも、日本人一億二千万人の心は何も変わっていないという状況では、意味がないと思うのです。もし、その英雄がいなくなってしまうと、元通りになってしまうからです。「一燈照隅 万燈照国」という言葉がありますが、一つの光が隅を照らし、その光が一万、十万、一千万、一億というように日本中に広がって初めて国が照らされるのです。誰かがやってくれるだろうと思っているのでは、何もできません。一人では何もできないけれど、自分は一人でもやってやろうという覚悟を持った者には仲間が必ず集まってきます。道は必ず開けます。だから、皆さんにもその最初の一人になってほしいと思います。その輪が広がっていった時に、社会が良くなるのです。ですから、大切なのは、皆さんご自身の最初の一步を踏み出す勇気とあきらめぬという覚悟です。

最後に、僕の個人的な話をさせていただきます。実は、今日は僕の母の誕生日なんです。200回以上講演会をしてきましたが、今日初めて母親を招待しました。息子の晴れ姿を見せたいと思ったんです。日々

生きていると、「お父さんお母さん、産んでくれてありがとう、今日まで育ててくれてありがとう」と思えるんです。僕は、両親が大好きなんです。その両親に、これからも「祐二を産んでよかった」と思ってもらえるように、毎日を生きていきたいと思っています。それが僕にとっての縦のつながりなんです。自分だけの命ではなく、両親がいて、そのご先祖様がいるから、僕はこれからももっとがんばっていかなくてはならないのです。皆さんご自身、それぞれ縦のつながりは違います。そこを意識して生きていくことが大切だと思います。本日は、どうもありがとうございました。



荒川祐二 ホームページ <http://arakawayuji.com/>
オフィシャルブログ <http://ameblo.jp/yuji-arakawa/>



■分科会

今年度の開催地である和歌山県では、地元ならではの伝統文化、環境問題、地域振興等の興味深い八つの分科会が設けられました。参加者は多彩な分科会に参加することにより、県内の歴史、文化、特色のある取組に対する理解を深めることができました。

1. 熊野古道～地域遺産から世界遺産へ



2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として高野山と共に世界文化遺産に指定された熊野古道。世界遺産登録に向け、市民活動家として活躍した小野田真弓さんを講師に招き、登録への経緯や古道の魅力について伺いました。

2. 120年の絆 トルコ・串本交流の記憶



120年以上前、和歌山県の串本沖でトルコ軍艦が難破。住民たちが救助に尽力したことから、現在もトルコと串本の友好は続いています。「日常の中にある国際交流」について、トルコ・串本の例を学びながら考えました。

3. 太地の鯨と歴史 捕鯨問題を考える



捕鯨文化について考える分科会。国際的に捕鯨について賛否両論に分かれる中、長い歴史の中で地元の漁師や暮らしてきた人々は、鯨といかにかかわってきたのか、それらの歴史を紐解くことで見える異文化理解について新たな視点を探りました。

4. たま駅長誕生秘話 ローカル電車の未来を考える



一時は廃線の危機にさらされた和歌山のローカル線「貴志川線」。市民運動が大きな社会的ムーブメントになり、結果として存続に成功した経緯を聞き、貴志川線を支える人たちの思いや生活を守るための市民運動の意義を考えました。

5. 知ろう、残そう！ 小さいのちが生きる場所



近畿最大級の干潟、和歌浦には多様な生物が生息しています。中には絶滅危惧種に指定されたカニ類や貝類も生息しており、人と自然の共生を動物たちが教えてくれます。今回は、この干潟を長年研究する和歌山大学の古賀庸憲教授を講師に、干潟の自然について学びました。

6. 和歌山発 市民で創る自然エネルギー



東日本大震災を受け、エネルギー分野への関心が高まっています。そんな中、市民レベルで市民自身が当事者となってエネルギーを作り出す事例が見られるようになってきました。日照時間の長さや山地、海辺などそれぞれの地域性に合った市民協働発電について学びました。

7. その時アナタはどう動く いのちを守る防災運動会



地震への備えはハードだけでなくソフトも重要だということを、東日本大震災では改めて感じさせられました。この分科会では、「いざ」という時に反射的に行動ができ、さらに身近な物を使って被災時に役立つノウハウを身体を使いながら学ぶことができました。

8. より社会に貢献できる 事後活動を考える



今年、40周年を迎えた海友会は、内閣府青年国際交流事業の既参加青年だけでなく、県単位で実施する派遣事業の帰国者も活動しています。個人レベルでの活動から県域に広がった活動など、全国でも比較的活発な活動が続いています。活動の事例を交えながら、事後活動の在り方について考えました。

■東日本大震災及び台風12号による災害復興支援活動

発表内容	発表者
IYEO東日本大震災復興支援活動概要報告	日本青年国際交流機構 組織担当幹事 田中 佐代子
岩手県青年国際交流機構(岩手県IYEO)復興支援活動報告	岩手県IYEO 副会長 松崎 俊
宮城青年国際交流機構(宮城IYEO)復興支援活動報告	宮城IYEO 副会長 伊勢 みゆき
船と翼の会ふくしま復興支援活動報告	船と翼の会ふくしま 会長 菅野 裕子
岩手県陸前高田市復興支援活動報告	陸前高田市副市長 久保田 崇
台風12号被災について和歌山県報告	海友会(和歌山) 理事 芝本 和己



台風12号の被害について報告する
海友会理事 芝本和己氏



岩手県青年国際交流機構 松崎俊副会長による報告



宮城青年国際交流機構 伊勢みゆき副会長による報告



船と翼の会ふくしま 菅野裕子会長による報告



宮城IYEOの活動を紹介するパネル

■地域理解研修

コース名	
1. 和歌山市内散策コース	3. 和歌山文化体験コース
2. 熊野古道体験コース	4. 高野山参拝コース

熊野古道体験



2004年に世界遺産登録された熊野古道を詳しい
解説を聞きながら歩きました

高野山参拝



参加者は、金剛峯寺と奥の院を視察しました



参加者・関係者での全体集合写真



第5回「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA)国際大会 5th SWYAA Global Assembly



第5回SWYAA国際大会※は、2011年9月28日(水)から10月2日(日)にメキシコ合衆国のメキシコ・シティで開催され、15か国から約70名が参加しました。

開会式では、メキシコ政府の大使や日本大使館の目賀田大使にごあいさついただきました。2回開催された事後活動協議会では、各国の事後活動組織で実施しているプロジェクトや個人の活動の発表と意見交換が行われ、参加者は、事業で培った絆や今後の活動の発展を深く認識する機会となりました。

また、オプション・ツアーとして、10月3日(月)から6日(木)にグアナファト観光が行われました。
(※SWYAA国際大会は、1995年から実施していた「インターナショナル・リユニオン」の名称を2007年に変更したものです)



スケジュール

日付	プログラム
9月28日(水)	歓迎レセプション兼オリエンテーション
9月29日(木)	開会式、基調講演、事後活動協議会 (Part 1) メキシコ国立人類学博物館訪問 公式歓迎ディナー
9月30日(金)	メキシコ・シティ市街地訪問 連邦議会議員との意見交換会 ルチャ・リブレ(メキシカン・プロレス) 観戦 マリアッチ(メキシコ伝統の楽団による演奏) 鑑賞
10月1日(土)	テオティワカン市による歓迎式典 古代都市テオティワカン訪問 フェアウェル・ディナー
10月2日(日)	事後活動協議会 (Part 2) 閉会式 世界遺産のソチミルコ訪問

■ 事後活動協議会で提案された主な内容(抜粋)

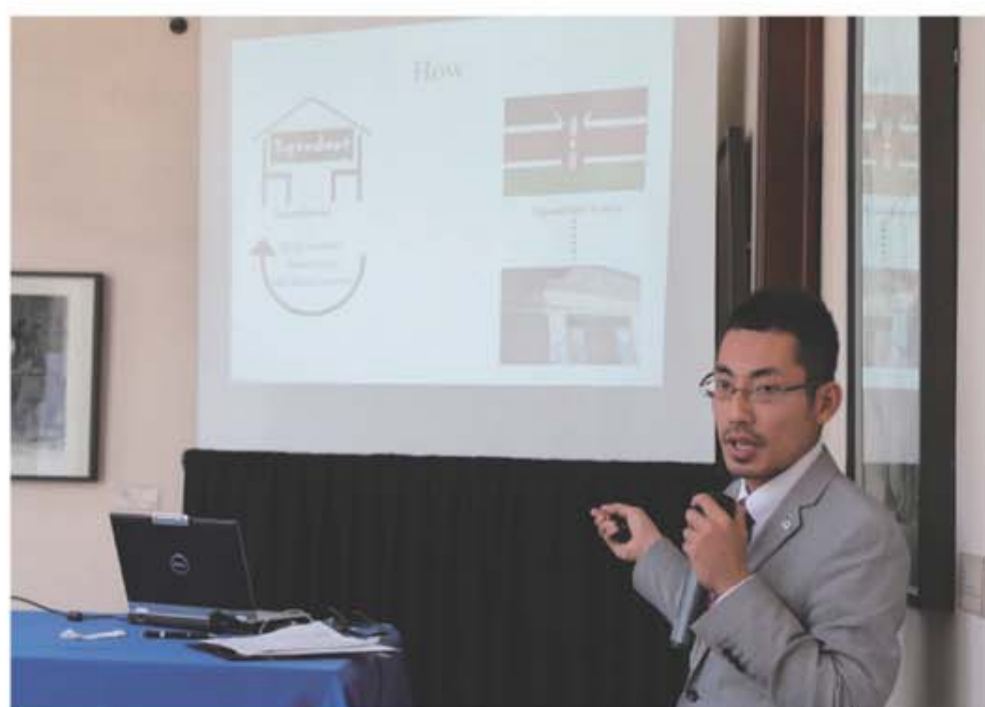
- 経験を共有する：既参加青年が行ったプレゼンテーション資料等を自由にアップロード/ダウンロードできるようなウェブサイト構築する。フェイスブック、ツイッターのようなソーシャルメディアを使いこなすための研修を実施する。各国の事後活動組織の会則を共有し、互いに学ぶ。
- 各国の学校をつなぐ：様々な国の生徒をつなぐネットワーク作りをする。手紙の交換などをする際、翻訳のサポートを既参加青年が行う。
- 1月18日「世界青年の船」記念日：世界同時にイベントを行う。
- 統一ロゴ：各国の事後活動組織のロゴとは別にSWYAA統一のロゴを作成する。



開会式(左から、内閣府吉田参事官補佐、メキシコ外務省Xilotl大使、目賀田駐メキシコ大使、大河原IYEO会長、Watanabe大会委員長)



既参加青年が実施したメキシコ国際連合協会(AMNU)公認のプログラムに参加した子供たちから、日本の被災地の子供たちのために準備したプレゼントについて発表するメキシコの既参加青年



事後活動協議会で、SWY22の有志が始めたケニアの小学校を支援するプロジェクト「ツペンダネ」の活動について発表する事後活動組織の代表として派遣された鴨井智士さん



メキシコ既参加青年のガイドで、国立宮殿を訪れ、アステカ建国から近代までのメキシコの歴史を物語る壮大な壁画を見ながらメキシコの歴史を学ぶ



メキシコ下院議長など様々な要職を歴任したPorfirio Muñoz Ledo 議員とラテンアメリカ・メキシコの政治、メキシコにおける報道の自由、青年の政治参加などについて意見交換会を行った



マリアッチ(メキシコ伝統の楽団による演奏)で有名なガリバルディで、マリアッチと一緒に歌い、踊り、メキシコ文化を楽しみ、交流を深めた



事後活動協議会 (Part 2) では、事後活動として取り組みたい内容に関して小グループに分かれて話し合った



テオティワカン市庁舎前広場で行われた盛大な歓迎セレモニーで、Eodelfo Gomez Escobedo テオティワカン市観光工芸局長の歓迎を受け、お礼に、参加者全員でソーラン節を披露した



古代都市テオティワカン遺跡では、神殿やピラミッドに入る許可を得るための、人と人をつなぐ古代の儀式を受け、テオティワカンやアステカ文明についての説明を受けた後、ピラミッドに登った



世界遺産のソチミルコを訪問し、トラヒネラと呼ばれるメキシコの伝統的な手漕ぎボートで水路を移動、ソチミルコのスポーツ文化ディレクターの歓迎を受け、浮島を見学し、昼食をとった

■ 感想(一部抜粋)

日本青年国際交流機構会長 大河原 友子

メキシコでの国際大会は、「世界青年の船」事業への熱い思い、大会への期待が一つになった上に、ラテンの雰囲気でも盛り上がり、その目的が十分達成されました。

1. 年代を超えた既参加青年が集まり情報交換をし、世界中の事後活動組織のネットワークを強化する。

参加者の中には事業参加年や国が異なる初対面のメンバーもたくさんいたが、SWY family の一員=志が同じ方向を向いているという共通点があるため、すぐに皆が打ち解け共に活動できた。これはまさに、GAの魅力であると思った。

2. 「世界青年の船」事業で学んだことをいかし、下船後それぞれが社会の中でその経験をどのようにいかしているかを報告する。

事後活動協議会では、異文化理解、社会貢献、平和などのキーワードを基に、世界中ですばらしいアイデアが形になり実践されていることがまさに「世界青年の船」事業の成果であると実感した。

3. 事後活動協議会で話し合われたことを実現する。

事後活動協議会の中で多くの意見交換をし、出てきた一つ一つのアイデアが実現できるよう今後の継続的な活動を期待する。

4. 開催国の文化や人々を理解する。

とびっきり明るく心温まる既参加青年や現地の人々のメキシカンホスピタリティを肌で感じる事ができた。また、メキシコ外務省Xilotl大使やメキシコ外務省アドバイザー Embajadore Calvo氏、メキシコ下院議長等要職を歴任したPorfirio Muñoz Ledo議員などの話を聞いたり、交流したりする機会に恵まれ、大変良い経験となった。

このようなすばらしいGAを開催してくれたメキシコのKento Watanabe実行委員長やAlberto Negreteメキシコ事後活動組織会長を始めGA2011開催にかかわったすべての方々に心から感謝いたします。

日本青年国際交流機構 (IYEO) の東日本大震災復興支援活動への取組

主に内閣府(総理府/総務庁)の青年国際交流事業に参加した青年で構成される日本青年国際交流機構 (IYEO)では、3月11日の東日本大震災直後より、本部役員と被災県のIYEO役員が連携し、長期的な視点で復興支援活動を行っています。

震災直後の被災県への物資提供支援を中心とした活動から、現在は、被災された地域の高齢者や子供たちを中心に心のケアを考えた独自のプログラム等を企画、実施しています。今回は、様々な復興支援活動の中から岩手県、宮城県、福島県の特徴ある活動について紹介します。

また、国内外から集められた寄付金は、支援物資の提供や被災県IYEOを中心としたIYEO復興支援活動に役立てられているほか、お見舞い金として被害の大きかった会員の皆様に確実にお届けしています。



岩手県青年国際交流機構

■IYEO縁側カフェ

岩手IYEOでは、震災直後の生活支援から移行し、現在は心のゆとりや被災した観光地支援を目的とする長期継続を念頭に置いた活動を続けています。「IYEO縁側カフェ」は、被災者やボランティアの方々にはコーヒーやお茶だけでなく、おしゃべりやくつろぎの時間・空間を提供する活動で、子供には遊び場も用意。ストレスの軽減や傾聴による心のケアにつなげようという取組です。6月から12月まで田野畑村、釜石市、大槌町、陸前高田市等の仮設や広場等で計18回実施、約2500杯のコーヒー全てをハンドドリップで提供しました。時間の経過とともに、被災地の状況、被災者の心境も日々変化しています。今後は「自分

も何かやりたい」という被災者の方々にもスタッフとして参加していただくなど「支援から協働」へ展開を図るほか、店舗が再開してきた地域は避け、憩いの場のない場所や仮設等を重視し実施していく予定です。また、この活動には全国のIYEOのみならず、世界各国からもコーヒーやお菓子のご協力をいただくなど計り知れないご支援や励ましを頂戴しました。それらに込められた思いを現地に届けるためにも、岩手県IYEOは縁側カフェをはじめ活動を続けてまいります。私達ボランティアも現地の方々も「自分にできること」「一緒にできること」を自主性と柔軟性、創造力を持ってやり続けることで笑顔と強さのある未来につながると考えています。



なじみの顔が集い、様々な会話が飛び交う



話に耳を傾けるスタッフ

宮城青年国際交流機構

■物資支援

12月以降石巻市立病院に防寒着、防寒対策グッズ、仮設巡回に必要な物資等を計5回届けました。

《主な支援物資》

ロングダウンコート、ヒートテックインナー、レギンス、タイツ、靴下、ネックウォーマー、帽子、マフラー、イージーウォームパンツ&スカート、防水加工ブーツ、手袋、健康相談時に使用するマグカップ等

《支援物資を受け取った方々の声》

- ・ 荷が届いた時、皆から歓声があがりました。この寒さの中、ヒートテックは大活躍です。
- ・ 温かくて濡れないブーツは、仮設巡回で砂利の上や、滑りやすい場所を歩く私たちにとっては、とても助かります。いつもご支援、本当にありがとうございました。
- ・ 巻きスカートは暖かくて癖になりそうです。皆、心より感謝しています。被災地では、震災失業等のためアルコール依存や自殺者が増えていると言われています。看護師さんが保健師さんと連携しながら、仮設の独



防寒着を受け取る石巻市立病院のスタッフの皆様

居の方や高齢者、アルコールに依存気味の方々の孤独死や自殺防止のために毎日(年末年始なく)、活動しています。特に一人暮らしの男性の方の支援は大変です。巡回しながら声かけをし、独居の男性や高齢者の方々が「健康相談」に参加され、食事指導を受けておられました。その方々が看護師さんたちとの訪問や会話を楽しみにしていることが分かり、仮設入居者同士の交流の場ともなっています。引きこもりがちな仮設入居者同士がつながりを持つことの大切さを感じています。

■リラックス&リフレッシュ温泉ツアー

7月30日(土)～31日(日)と8月6日(土)～7日(日)の2回に分けて90名を対象に実施した第一弾温泉ツアー(被災した石巻市内で医療に従事するスタッフとご家族を対象)が好評であったために、第二弾の温泉ツアーを3月17日(土)～18日(日)の日程で山形県IYEOと協働で企画・実施いたします。第一弾は、IYEO会員の皆様からいただいた支援金で実

施できましたこと、山形県米沢市の受入先の方々が大変温かく迎えてくださり、誰もがリラックス&リフレッシュすることができたことに深く御礼申し上げます。

第二弾は、石巻市立雄勝病院スタッフを対象に、引き続き山形県IYEOの協力のもとに実施する予定です。

健康相談の資料を作成する石巻市立病院に勤務するIYEO会員の及川敦子さん



船と翼の会ふくしま

■国際理解キャラバン隊

船と翼の会ふくしまでは、10月26日(水)～31日(月)にかけて、福島県内の児童や学生に多様な文化や価値観を体験する機会を提供することを目的として、「国際理解キャラバン隊」を実施しました。国際ボランティアNGOのNICEの協力で集められた外国人と福島県在住の外国人の方々と一緒に福島市立大森小学校と福島市立渡利小学校で国際理解講座を開催するほか、福島大学での東日本大震災をテーマとしたディスカッション、立子山自然の家で自炊合宿を行いました。

大森小学校では、4、5、6年生と交流しました。児童は、タイ、ベトナム、米国、メキシコ、フィンランド、ベルギー、スリランカ、中国、エジプト、フィリピン等多国籍の外国人講師と触れ合うことで、日本と各国には文化や生活習慣で異なることがあると同時に、共通することも多くあるということ

を学びました。また、渡利小学校では、5年生がゲームやクイズのほか、八木節を外国人講師と一緒に演奏し、最後に「I love you & I need you ふくしま」を合唱し、全員で一体感を味わうことができました。

また、福島大学のディスカッションプログラムでは、福島大学の留学生も加わり、日本人と外国人混合の6名程度のグループに分かれて英語によるディスカッションを行いました。震災に対する各自の思いの共有をした後に、今後、福島の復興のために自分たちには何ができるのか、何をしていくべきなのかをグループ毎に話し合い、ポスターにまとめました。この活動が次へ進むきっかけになることを願います。

今回の事業を通じて、福島の方々は多くの外国人も福島を応援してくれていることを実感し、外国人たちは福島の子供や若者が前向きに頑張っている姿を直に見ることができました。



小学4年生約130人を対象にした大森小学校での国際理解講座

※一般の方の写真掲載については、関係者の了解をいただいています。



小学6年生約100人を対象にした渡利小学校での国際理解講座

IYEO本部での取組 <http://www.iyeo.or.jp/ja/shien/index.htm>

①IYEO東日本大震災募金活動

2012年1月30日(月)時点で総額12,996,608円 (団体8,376,257円、個人4,620,351円)

②活動報告

- ・IYEO本部における復興支援活動報告
- ・各都道府県IYEOでの支援活動報告
- ・各都道府県IYEO以外の団体・グループメンバーによる支援活動報告
- ・被災地の方々を支援する全国で行われている会員を中心としたチャリティーイベント等
- ・海外での政府・事後活動組織、既参加青年を中心とした個人の活動

③海外からの応援レター・メッセージの掲載

世界中の関係団体や事後活動組織からの応援レターやメッセージを更新

④IYEO会員からのメッセージの掲載(メッセージ・ボード)



コア派遣3分野の最新動向と情報交換会

～派遣の体験をさらに発展させるために～

「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」(以下、コア事業)が今年度10回目を迎えるに当たり、専門分野で活躍している既派遣者が、派遣年次・分野を超えて情報交換を行い、今後のネットワーク強化につなげることを目的とし、平成23年12月10日(土)、日本青年国際交流機構(IYEO)において集いを実施し、34名が参加しました。

■分科会

1. 派遣分野における国内外との継続的なネットワーク

派遣後、定期的集まり、国内外の団体や施設を視察している派遣団の具体例を元に、視察先へのアプローチ方法、継続的な活動の運営方法など、国内外とのネットワークの拡大・活用について話し合いました。

2. 専門分野を活かした社会への還元

団体での実践と並行して学会や専門誌で事例発表をしている既派遣者もいます。派遣での学びをそれぞれの分野でどのように社会に還元し、いかしていくのかを話し合いました。

3. 分野を超えた地元ネットワーク

派遣をきっかけに、複数団体が協力して事業展開している事例や、地元IYEOの活動で他事業の既参加青年と連携して地域活動を行っている事例を元に、今後の3分野連携について話し合いました。



日程

	日時	内容
12月10日(土)	12:30~12:45	受付
	12:45~13:10	開会式
	13:10~14:30	平成23年度派遣者からの帰国報告 派遣国: 高齢者分野 デンマーク 障害者分野 ニュージーランド 青少年分野 ドイツ 派遣期間: 平成23年10月9日~18日
	14:30~15:00	Tea time
	15:00~18:00	分科会
	18:00~19:00	チェックイン、移動
	19:00~21:00	懇親会
12月11日(日)	~9:00	朝食、チェックアウト、移動
	9:00~12:00	分科会(続き)
	12:15~12:30	閉会式、解散

実行委員長からのあいさつ

平成16年度オーストラリア派遣団(青少年分野) 福田 達男

私は2003年から現在まで招へい事業に携わってきました。最初の頃は、派遣者の中でも自分の専門分野を学びたいという意識が強すぎて、コア事業が持つ「非営利組織の運営」という大きな視点が不足しているケースが多かったことも、今となっては過去の話です。本事業に参加することで自分の所属団体の社会的意義を改めて認識して学びを実践するなど、確実に団体・社会のコアとなる人材育成につながっています。

この10年で我が国における財団、社団、特別非営利活動法人(NPO法人)、社会福祉法人等の非営利組織の役割は大きく変わりました。団体が独自に活動することから、社会が求めるサービスを団体同士の連携で提供することも必要になりました。本事業出身者が我が国全体のコア(中核)を担う人材となり、出身者同士の協力が団体間の連携のきっかけになっていくことを願わずにはられません。

今後、事後活動として、外国参加青年を含めたリユニオンを海外で開催することも計画しています。

平成21年度英国派遣団(高齢者分野) 温井 智美

意義な議論が交わされました。コア事業の3分野は、いつか自分が当事者になる(かもしれない)領域です。例えば、「私がオバアサンになったら」。その時、どんな社会に暮らしたいと望むか。その実現のために、コア事業のつながりをいかして、私たちに何が出来るか。今後もチームコアの一員として、よりよい社会を目指して“Do something”し続けたいと強く願っています。最後に、私たちがいつも応援して下さる多くの皆様に心から感謝申し上げます。

コア事業の魅力の一つは、既参加青年が数人集まれば「即席多職種チーム」が結成されることではないでしょうか。私はこれまでに、コア事業の同期派遣者と看護学会発表や海外スタディツアーを行ってきました。また、震災後の医療支援として被災地に赴任した際も、被災県在住の同期派遣者が活動拠点の避難所まで訪ねてくれ、一緒に活動してくれました。事業後も、各専門性をいかして、持続的に協働できる関係はコア事業の醍醐味です。

コア派遣3分野の最新動向と情報交換会(プレ10周年の集い)では、大変有

今月の表紙

IYEOがスリランカ教育支援プログラム(One More Child Goes To School)で支援しているスリランカ南部マータラ県ハクマナ地区のMalshi Dilsharaさん(9歳)が描きました。



編集後記

第18回青少年国際交流全国フォーラム和歌山大会の基調講演はいかがでしたか? 講演者の荒川祐二氏は、躍動感あふれる生き生きとした語り口で、行動することの大切さを話されました。講演そのものは関西弁でしたので、大阪で生まれ育った編集者(ふ)には、親しみ深く感じられ、なんだか元気がわいてきました(ふ)

MACROCOSM 2月号 vol.96

2012年2月10日発行

編集 マクロコスム編集委員会

発行 (財) 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町

2-35-14 東京海苔会館6階

TEL: 03-3249-0767 FAX: 03-3639-2436

e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

URL: <http://www.centrye.org/> (CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp/> (IYEO)

編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構(IYEO)

定価 200円 本体191円

印刷所 株式会社デックス

TEL: 03-3400-8089 FAX: 03-5469-5270